第 7 回

『逃げる公家、媚びる公家』

渡邊大門、柏書房、2011年

貧しい公家たちの
生き残り作戦

今回取り上げるのは、渡邊大門氏の『逃げる公家・媚びる公家』（柏書房、2011年）です。

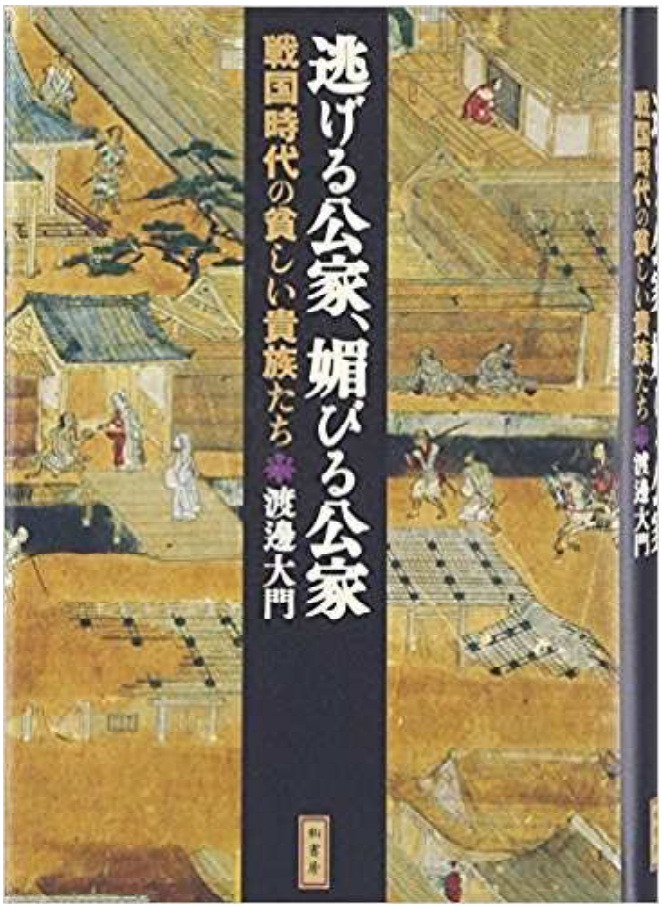
著者の渡邊大門氏は、日本中世史がご専門で、「株式会社歴史と文化の研究所」代表取締役、大阪観光大学観光学研究所客員研究員をされています。個人の日記など一次史料を重視した研究を行っておられます。

著書には、『中世後期山名氏の研究』(日本史史料研究会、2009年)、『戦国期赤松氏の研究』(岩田書院、2010年)、『戦国誕生――中世日本が終焉するとき』講談社現代新書、2011年)など「硬い」ものから『戦国武将はイケメンがお好き？』(KKベストセラーズ〈ベスト新書〉、2009年）『「アラサー」が変えた幕末――時代を動かした若き志士たち』（毎日コミュニケーションズ〈マイコミ新書〉、2009年）のような「やわらかい」ものまで数多くの本を書かれております。

今回の『逃げる公家・媚びる公家』と次回取り上げる『戦国の貧乏天皇』の２冊とも、「知らなかった！」「そうだったのか！」と、目から鱗が落ちることが次々に出てきます。大変、勉強になりました。その一端を紹介しまーす。

なお、このホームページで過去に取り上げたものは、近世、それも江戸時代に関するものが多かったのですが、今回は中世、戦国時代が中心となります。でも、戦国大名が主役ではありません。戦国時代の主役である上杉謙信や伊達政宗などは登場しません。武田信玄は少し登場しますし、現在ＮＨＫ大河ドラマ『おんな城主　直虎』でも登場してきた「女戦国大名」と呼ばれた今川義元の母寿桂尼も出てきます。

『逃げる公家・媚びる公家』の主役はもちろん公家です。応仁の乱以降、いわゆる戦国時代に突入していきますが、焼け野原となった京都に公家の姿はほとんどありません。彼らはどこに行ったのでしょうか？　逃げた先で、彼らは一体何をしていたのでしょうか？



これらの疑問に答えてくれるのが渡邊大門氏の『逃げる公家・媚びる公家』（柏書房、2011年）です。早速、登場してもらいましょう。

応仁の乱以降は京都も戦乱に見舞われ、京都周辺や地方に疎開する公家が多くなり、やがて朝廷の運営がままならなくなります。時代の進行とともに、朝廷の職務を果たす公家の数が少なくなったのが原因です。公家は「生活」という現実的な問題を抱えており、その栄光は少しずつ失われつつありました。しかし、この事態に対して、公家は黙っていたわけではなかったのです。

公家の中には、収入を確保するために、現地へ直接赴き直接荘園の管理を行う者もいました。場合によっては、現地の戦国大名のもとで庇護を受け、学問を享受することによって、生活を成り立たせる者もいました。ある公家は京都にあって、大名の求めに応じて『源氏物語』や『古今和歌集』等の古典を書写し、売却することで金銭を得ていました。応仁の乱以降、戦乱の様相が強まってきますが、公家はたくましくその時代を生き抜いたのです。

応仁の乱以降、本来天皇を中心に政治・行政に関わらなければならないのに、公家の皆さんは我先に

と命の危険もある都を離れ、そして逃げついた先では貧しい生活を余儀なくされました。でも、公家の中には、生きていくために、自分のやるべきことをしっかりとやり抜き、子孫が生き延びていくことができるように力強く活動した人々もいました。そんな人々を紹介していきます。

まず最初に、公家って何でしょうか？　公家と一口に言っても、様々な種類がありますよね。『逃げる公家・媚びる公家』では下記のように説明しています。

たとえば、三位以上の大臣、納言、参議は公卿もしくは上達目（かんだちめ）と呼ばれました。それに続く、四位・五位の者は、殿上人と呼ばれました。彼らは、天皇の居所である清涼殿への昇殿を許される存在でした。昇殿を許される家柄は、のちに「堂上家（どうしょうけ）」と称されています。

一方、六位以下の者は昇殿を許されず、彼らは「地下家（じげけ）」と称されていました。彼ら下級役人は、実際の朝廷運営の下支えをしていたのです。・・・。一般的に公家というのは、五位以上の家柄を示しますので、彼らは該当しないことになります。

五位と六位との間には、単に昇殿という問題にとどまらず、明確な格差がありました。たとえば、蔭位という制度では、父祖の位によって子孫が一定の位を与えられるようになっていました。・・・高い公家の子孫は、最初に与えられる位が下位の公家よりも、高く設定されていたのです。こうして、公家の家格は固定化されていきました。

ところで、「堂上家」内部においても家格差がありました。どんなふうになっていたのでしょうか？実は、以下のように家格が設定されているのだそうです。

①摂関家・・・大納言、右大臣、左大臣を経て摂政、関白、太政大臣に昇任できる家柄。
近衛、九条、二条、一条、鷹司の五家。

②清華家（せいがけ）・・・摂関家に続く家柄で、太政大臣まで昇任できます。
久我（こが）、転法輪（てんぽうりん）三条、西園寺、徳大寺、花山院、
大炊御門（おおいみかど）、今出川、醍醐、広幡の９家。

③大臣家（だいじんけ）・・・清華家に続く家柄。太政大臣まで昇任できることになっているが、実際には内大臣を超えて昇任した例はない。
正親町三条、三条西、中院（なかのいん）　の３家。

④羽林家（うりんけ）・・・大臣家に続く家柄。大納言まで昇任できる。（例外的に内大臣まで昇任した者がいた）。
橋本、上冷泉、下冷泉、飛鳥井、姉小路、清水谷、山科など２３家。

⑤名家（めいけ）・・・羽林家と同格の家柄。例外的に、左大臣、内大臣に昇任した例がある。
日野、広橋、柳原、烏丸、中御門、甘露寺、葉室、勧修寺、万里小路など
６６家。

⑥半家（はんけ）・・・堂上家で最下位の家柄。大納言まで昇任できる。高倉など２６家。

①の摂関家は日本史の授業でよく登場してきます。いわゆる五摂家ですよね。「ニクイタコ」で覚えましたよ。「二条・九条・一条・鷹司・近衛」でしたね。五摂家筆頭が近衛家でした。

稀代の大学者、一条兼良

さて、ここで「稀代の学者」と言われた一条兼良に登場してもらいましょう。

そもそも、一条兼良って誰でしたっけ？　何をした人でしょう？　代表的著作は何でしょうか？

一言で言えば、室町時代の公卿で大学者ですよね。永享4（1432）年に摂政・氏長者に就任し、1447年以降は太政大臣、関白にも就任しています。一条家出身だから「公家中の公家」とも言うべき存在です。特にその学識は、群を抜いていたそうです。

一条兼良の残した主な著作は以下の通りです。真ん中の３冊は入試にも出てきますよね。

『日本書紀纂疏（さんしょ）』・・・『日本書紀』の注釈書。
『花鳥余情』・・・・・・・・・・・『源氏物語』の注釈書。
『公事根源』・・・・・・・・・・・子弟の教育のために書いた有職故実書。
『樵談治要』・・・・・・・・・・・将軍足利義尚の政道に関する質問に回答した意見書。
『桃華蕊葉（とうかずいよう）』・・有職故実や一条家の財産を記した書物。

兼良は古典の注釈や教訓書に限らず、和歌や仏教の分野でも執筆し、多彩な才能を発揮しました。「五百年来の大学者」「一天無双の才」と言われ、名声をほしいままにしました。

ただ、兼良自身が「菅原道真以上の学者である」と豪語したというのを聞くと、筆者は、ちょっとしらけてしまいますが。

ところで、一条兼良の祖父で、摂政・関白、太政大臣にもなり、能の大成者世阿弥がまだ若かったときに、彼を保護したと言われる人物は誰でしょう？

そうですね。二条良基でした。和歌や連歌、蹴鞠などに通じ、連歌の大成者でもあります。

ところで、二条良基は連歌師の救済とともに『菟玖波集』20巻を撰します。また、彼が1372年に連歌式目として制定したものは何でしょうか？

『応安新式』でしたね。

さて、一条家の財政を支えていたのは、各地に散在する荘園などでした。一条家に伝わる古典籍の数々も大きな財産と言えます。土佐国や備後国、尾張国などにも荘園がありました。しかし、いずれの家領荘園も応仁・文明の乱以降は、それぞれの国の有力武将の侵略や代官による年貢の横領によって、実際には有名無実化していきました。こうしたことが重なり、一条家の財政が疲弊していきます。

そして、応仁元（1467）年、応仁の乱が勃発します。京都が戦場ですから、命の危険があります。そこで、子どもを頼って疎開することになります。疎開先が大和国でした。そこには、兼良の五男がいたからです。

そこで、質問です。奈良の興福寺の大乗院門跡になっていたのが兼良の息子なのですが、彼は当時の政治・社会情勢を書き記した『大乗院寺社雑事記』の作者でした。では、その人物とは誰でしょうか？

そう。尋尊ですよ。

ところで、『大乗院寺社雑事記』といえば、何の史料として有名でしょうか？

はい、『山城国一揆』でしたね。

一条兼良が奈良に疎開したのは、関白に就任してから三ヶ月後の八月だったそうです。前内大臣九条政忠や前関白の鷹司政平なども一緒だったと言います。やがて、奈良には大勢の公家が疎開することになり、都さながらの様相を呈したようです。時の後花園天皇は兼良に対して帰京することを命じますが、なんとこの命令に兼良は応じませんでした。その代わり、二条政嗣が関白職を望んだので、あっさりと関白職を辞職したと言います。

その後（文明5年、1473年頃）、美濃国守護代斎藤妙椿（みょうちん）のもとを訪問します。彼は美濃国土岐氏の配下にあって、守護代を務めていましたが、その威勢は当主の土岐氏を凌ぐほどで、応仁･文明の乱では西軍の重鎮として戦いました。妙椿は武力だけでなく文芸にも秀でており、兼良以外には歌人として著名な東常縁とも親しい関係にあったそうです。

文明11（1479）年8月に、兼良は越前国朝倉孝景のもとを訪問します。兼良はこのとき78歳の高齢です。なぜ、兼良は越前国朝倉氏まで訪れたのでしょうか？

実は、前年に子息冬良が右大将に昇任したのですが、一条家は経済的に逼迫した状態で、参賀の費用にも事欠く状況にありました。当時、越前国足羽御厨（あすわのみくりや）に一条家領がありましたが、朝倉氏から年貢が運上されておりませんでした。そこで、兼良は自ら越前国に下向し、冬良の参賀の費用を工面しようと考えたのです。

高齢を押して越前国まで訪問し、足羽御厨をはじめ越前国の一条家領の返付を求めましたが、その結果はどうなったのでしょうか？

朝倉氏は足羽御厨に対する兼良の要求を拒否します。しかし、二万疋（二百貫）が兼良に与えられました。現在の貨幣価値に換算すると２万疋は約２０００万円です（１貫文が約１０万円）。わざわざ越前まで行った甲斐があったと言えますかね。

でも、朝倉氏からすれば、手切れ金でしょう。２０００万円を渡したのだから、今後は、足羽御厨からの年貢は送らないぞ、と引導を渡したのかもしれません。

応仁の乱が終わった翌年、文明10（1478）年には、一条兼良は将軍家や日野富子に対して『源氏物語』や『伊勢物語』の講釈をします。兼良は政治への関心が深く、富子に『小夜のめざめ』という一書を与えます。同書の目玉は政道、特に女人政治の肯定を強く打ち出したことで、兼良は北条政子が承久の乱で活躍した例を挙げ、政子の賢政を「道理」として説きました。「女性であっても賢者であるならば、政治を行うことは道理である」ということばに富子は感動したと言います。

文明13（1481）年、兼良はついに亡くなります。80歳のことでした。混乱期にあって、積極的に生活の糧を求めようとした兼良の姿勢は、まさに執念という感じがします。自己のためというよりは、子孫のために老骨に鞭を打って、己の使命を全うしようとしたように思えます。一条兼良の執念は、スゴいの一言ですね。

女戦国大名、寿桂尼

今年（2017年）のＮＨＫ大河ドラマは『おんな城主　直虎』ですね。視聴率は高くないそうですが、なかなか面白いです。登場人物のキャラクターに特徴があって、ドラマの中に自然と入り込んでしまいます。それに柴咲コウがいいですよね(*^o^*)

さて、この大河ドラマにも登場してきた寿桂尼って誰でしょうか？

桶狭間の合戦で信長に敗れた今川義元の母こそ、寿桂尼です。彼女の夫、つまり義元の父が今川氏親です。今川氏親は内政面でもその力量を発揮し、検地をいち早く実施しています。最も特筆すべき業績としては、有名な家法『今川仮名目録』を制定したことが挙げられます。氏親が亡くなる２ヶ月前の大永６（1526）年4月に『仮名目録』はできあがります。死の床にあった今川氏親が完成させるのは困難ですから、妻の寿桂尼が制定に係わったのではないかと考えられています。

ところで、今川氏親が寿桂尼と結婚したのは文亀５（1505）年のことです。寿桂尼は京の公家、中御門宣胤（なかみかどのぶたね）の娘でした（生年は不明）。

中御門家は勧修寺経利（かんじゅうじつねとし）の四男経継（つねつぐ）が興した家で、家格は上から5番目の「名家」です。中御門経継は後宇多上皇の側近として仕え、院の評定衆として活躍したそうです。その後も中御門家は天皇の側近的な役割を果たし、代々朝廷に仕えます。ただ、それほど目立った動きはしていないのですが、異彩を放ったのが中御門宣胤です。

宣胤は、嘉吉2年（1442年）に中御門明豊の子として誕生します。宣胤は朝廷の実務に明るく、後花園天皇と後土御門天皇の蔵人頭を務めるなど、両天皇から厚い信頼を得ます。応仁・文明の乱によって、朝廷の威勢は著しく衰退しますが、その中にあって宣胤は朝議再興に力を尽くしていきます。また、

宣胤は最高の知識人と言われた一条兼良に有職故実を学び、若い公卿らの指導にも当たります。和歌や書に優れており、主要な著作として『万葉類葉抄』があります。

寿桂尼は、この優れた知識人である父の元に誕生しました。なぜ中御門宣胤と今川家とが結びついたのか、決定的な証拠は見つからないそうですが、氏親の姉が正親町三条実望（さねもち）の妻であったことが大きいようです。

正親町三条実望は、上から3番目の「大臣家」の家格を有する公家で、摂関家、清華家に次ぐ名門です。九代将軍足利義尚の側近としても知られています。実望は明応9（1500）年から文亀２（1502）年に駿河国に下向しますが、このとき、氏親と面会したことは確実で、宣胤の意向を汲んで寿桂尼との結婚をまとめ上げた可能性は高いと言います。

宣胤にすれば、有力大名との縁戚関係を結ぶことは、今後、地方に下向することを念頭に置けば、願ったり叶ったりですよね。また、今川氏にとっても、宣胤や実望を介して天皇・朝廷とつながることは、大きなメリットがあったことでしょう。

氏親と寿桂尼が結婚することによって、具体的に、中御門家にはどんなメリットがあったのでしょうか？

中御門宣胤の日記『宣胤卿記』を見ると、氏親から宣胤に対して金品や贈答品（駿河の名産品）が贈られたことが分かります。当時、窮乏していた宣胤にとって、今川家からの「仕送り」とも言うべき金品や贈答品はありがたいものだったに違いありませんよね。

今川家には、具体的には、どんなメリットがあったのですか？

中御門宣胤は『太平記抜書』や『枕草子』を書写して贈っています。これは、上で書いた金品や贈答品の見返りとして、贈ったもので、文芸に関心を寄せていた氏親にとっては、とてもありがたいものだったことでしょう。

こうした贈答品のやりとりは、双方に大きなメリットがあったのですね。まさに、ギブ・アンド・テイクです。そして、同時に、中御門宣胤が地方文化に貢献したことにも注目すべきです。

これだけではありません。宣胤が氏親と強力な関係を結んでいたことが影響し、宣胤の子息宣秀の娘が朝比奈泰能（やすよし）に嫁ぎます。朝比奈泰能は今川家の重臣であり、後に数々の戦いで軍功を挙げた人物です。朝比奈泰能は寿桂尼の兄宣秀の娘を娶ることによって、今川氏とも姻戚関係を結んだことになります。

のちに、宣秀をはじめとする中御門家の人々は駿河国を訪れ歓待されます。戦乱期には多くの公家が下向しますが、中御門家では今川家と結ぶことによって、有力な下向先を確保したのです。したがって、寿桂尼の輿入れは大変意義深く、中御門家に大きなメリットをもたらしたと言っても過言ではないのです。

信玄の妻、三条の方

さあ、今度は戦国大名として有名な武田信晴（信玄）です。信玄と言うよりは、その妻の三条の方が主役です。

信玄が最初に結婚したのは、天文2（1533）年、13歳の時で、相手は武蔵国の河越城主上杉朝興（ともおき）の娘でした。それ以後、側室を複数もうけます。また、長篠合戦で織田・徳川連合軍に敗北した武田勝頼を産んだのが諏訪御寮人で、信玄が滅ぼした諏訪頼重の娘でした。そして、天文5（1536）年に信玄が三条公頼（きんより）の娘を本妻に迎えます。彼女は三条の方と呼ばれます。

三条公頼って誰でしょう。三条家というのは天法輪（てんぽうりん）三条家ともいい、藤原公実（きんざね）の子実行をその祖とします。なぜ、わざわざ「天法輪」三条家と言うのかというと、別に「正親町」三条家があり、区別するためなんです。家格は、摂関家に次ぐ上から２番目の「清華家」です。

三条公頼は太上大臣を務めた実香（さねか）の子として、誕生しました。天文15（1546）年に左大臣に就任し、その後、何度も様々な国へ下向していますが、最後は周防国大内義隆のもとへ訪れます。ところが、天文20（1551）年9月1日、大内義隆は家臣の陶晴賢の謀反に遭い、長門国大寧寺で自刃するという事件が勃発しました。このクーデター事件に巻き込まれて、三条公頼は非業の死を遂げました。この時57歳でした。

この公頼には3人の娘がいましたが、それぞれ「大物」に嫁ぎます。なんと、３人の娘は戦国時代の有名な実力者に嫁いでいるのです。

まず、長女は細川晴元の正室になります。細川晴元といえば、室町幕府の管領をつとめた人物ですが、家臣の三好長慶の反乱によって勢力を失い、亡くなります。なお、実権を持っていた管領としては「最後の管領」と言えます。

そして、次女（三条の方）は信玄の正室になります。武田家では公頼の娘を信玄が娶ることにより、幕府の重鎮である細川晴元と縁戚関係を結ぶことになったのです。室町幕府と繋がることは、武田氏の将来を見据えたときに、大変有効な政略結婚と言えます。もちろん、公頼も細川氏・武田氏から何らかの経済的援助を期待したことだと思います。

さらに、三女（如春尼）は石山本願寺の当主の正室になります。ところで、石山本願寺と言えば、織田信長が戦った最大のライバルと言ってもいい相手です。そのリーダーに公頼の三女が嫁いだのです。では、石山本願寺のリーダーとは誰でしょうか？

なんと顕如（本願寺光佐）です。浄土真宗本願寺派の第11世宗主ですよ。

顕如は15歳で結婚したと言われているので、永禄3（1559）年のことと考えられます。公頼の三女は、いったん細川晴元の養女になっています。したがって、顕如は、実質的に細川晴元の養女を迎え

たことになります。当時の本願寺の勢力は強大なものがあり、永禄11（1568）年の織田信長の入京後は激しく対立し、元亀元（1570）年に顕如は諸国の本願寺門徒に対して、織田信長と戦うことを呼びかけて挙兵しました。

ここから11年にも及ぶ戦いが続きましたが、この戦いを何と呼びましたか？

石山戦争と言いました。天正8（1580）年に、やっと織田信長は石山本願寺を屈服させました。

公頼の三女と顕如の結婚は、やはり本願寺という強力な宗教勢力との結びつきを意図したものと考えられます。当時の結婚はほぼすべてが政略結婚だったと言えますが、武田氏は三条公頼の娘を通じて、中央の有力な諸勢力とのつながりを得たのでした。

ということは、細川晴元と顕如と武田信玄は、三条公頼の縁で、なんと義兄弟だったんです！！　ビックリですよね。知りませんでした！！

この後、織田信長にとって大きな抵抗勢力となるのが、自ら15代将軍にしてやった足利義昭であり、石山本願寺であり、武田信玄でした。これらの有力な人物を結びつけていたのが、三条公頼の3人の娘たちだったのです！！そして信長包囲網を築いていくことになります。

うーん、政略結婚って、恐ろしいですね！そして、公家の娘は凄い力を持っていたと言えるんですね！